



島根県立三刀屋高等学校

校長 発 『本流』

【3月号】 令和6年3月1日



■卒業式式辞

暖冬を忘れるかのような、ここ数日の寒の戻りの中、蒼雲館前の梅が凛と咲き誇っています。

本日は、学校運営協議会会長小林直子様をはじめ、多数の来賓の方々のご臨席を賜り、卒業式を挙行することができました。誠にありがとうございます。

昨年5月8日の新型コロナウイルス感染症の5類移行とともに、教育活動の多くが徐々にコロナ禍前に戻ってきました。今年度“4年ぶり”という言葉は何度耳にしたでしょうか。この卒業式も“4年ぶり”に多くの来賓の方々をお迎えし、1・2年生と同じ空間で卒業生の晴れ舞台をお祝いするコロナ禍前の形態に戻して挙行することができました。当たり前と思っていたことが当たり前ではなかった3年間でした。思い起こせば、3年前は、1・2年生は出校停止で式には参列できず、2年前は1・2年生とも教室でリモート参加、昨年度は2年生のみ式に参加し、1年生は教室でリモート参加でした。式後のホームルームに保護者が参加できず、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝える卒業生のメッセージもモニターを介してのものになった年もありました。今ここにいる卒業生の皆さんが入学式の時には、2・3年生の参加がなく、皆さんと保護者の皆様のみでの参加でした。そのことを思うと、今こうして全生徒・保護者の皆様・そして多くの来賓の皆様とともに、卒業生の皆さんの門出を祝えることは万感の思いです。

来賓の皆様方には、卒業生を様々な面で支えていただきました。重ねて感謝申し上げます。生徒達は、本日高校を巣立っていきますが、これからの人生において向き合うべき幾多の局面があると思います。20年後、30年後の地元雲南市・島根県を支えていく若者達に、地元を愛する先輩として、今まで同様のご支援をお願いいたします。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。小学校・中学校の卒業式とはまた違う思いをされている方が多いのではないのでしょうか。4月からは社会人の仲間入りをするお子様、親元を離れて県外に旅立っていくお子様もいらっしゃると思います。お手元の卒業式の栞にはさまれているお子様にあてたメッセージには、これまでのお子様との思い出や、これまで伝えることができなかった思いなどが数多く寄せられています。保護者の皆様には、お子様が巣立っていかれる前に、人生の先輩としてご自身のこれまでの経験の一端を、ぜひ自らの声でお子様語りかける機会を持っていただけないでしょうか。学生時代のこと、就職・仕事のこと、転機となった出来事など何でも結構です。生徒たちは、今後自身が向き合うべき多くの局面で必ずその言葉を思い出すはずです。保護者としてだけでなく、メンター（助言・指導者）としてお子様を支えていてもらいたいと思います。

さて、卒業生の皆さん卒業おめでとう。皆さんは私にとって特別な卒業生です。校長として初めて卒業証書を渡すという記念すべき存在です。皆さんとは3年間、学校行事など多くの場面で同じ時を過ごすことができました。2年次の四国研修旅行も一緒に行きましたね。皆さんは、生

徒会活動や部活動などにおいて、常にリーダーシップを発揮して三高の教育活動を牽引してくれました。演劇部やソフトボール部の全国大会出場、プロ野球選手の誕生など、今年度「三刀屋高校」という学校名はメディアを席卷した感があります。私が印象に残っている光景は、サッカー部の県総体準決勝でのバスを仕立てた応援です。雨の中、ダンス部・野球部のリードにより、参加を希望した多数の生徒が、保護者・地域の皆様と一体となって応援してくれました。その応援に答えて戦ったサッカー部も、創部以来初の県総体3位という成績をおさめてくれました。翌月行った野球部の夏の大会壮行式では、サッカー部員が県総体のお礼とともに熱く応援歌を歌い、三高全体の一体感をつくり上げました。コロナ下では決して見ることのできなかつた“密な”青春を感じさせてくれました。皆さんには常に元氣や感動そして勇氣をもらいました。ありがとう。

今年度「向き合う。その先に…」を合言葉に設定し、4月の始業式では、自分自身に向き合い、そして自分自身と対話してほしい。大河ドラマの主人公のように「どうする自分」と問いかけながら悩みや課題に向き合ってみてはどうですか？難題を前にして“よわい”自分に向き合いながらも課題解決にあたっていく姿には、逆に“つよさ”を感じます。という話をしました。

「人生は最善観」という言葉があります。最善観の最は最高・最良の最、善は善悪の善、観は主観・客観の観です。哲学者で教育学者の森信三氏が唱えたこの言葉は「人生で起こりうる出来事は必然かつ最善である」という意味です。一見無意味に思えること、つらいこと、悪いことと思えることも、自分に与えられた最善の出来事として向き合い、乗り越えた先には必ず自分にとって有用となるという考え方です。卒業生の皆さん、これからの人生には様々なつらい局面もあるかもしれません。そんな時には、この「最善観」という言葉と保護者から聞いたリアルな経験談を思い出して、直面する課題や自分自身に向き合いながら乗り越えていってください。コロナ禍を乗り越えてきた皆さんならきっとできるはずです。

大丈夫ですよ。

「向き合う。その先に…」一回り成長した自分自身の姿を思い描いて。

以上、式辞とします。

令和6年3月1日

島根県立三刀屋高等学校
校長 本間 達也